

パルボウイルス感染症

Canine Parvovirus Infection

このパルボウイルス感染症もジステンパーと並ぶ致死率の高い代表的なウイルス性伝染病です。その症状からパルボウイルス腸炎ともよばれ、世界各地で発生しています。主に消化器症状が中心ですが、仔犬などは心筋にもダメージが加わり突然死が起こることもあります。現在でもワクチン未接種の仔犬や成犬、追加接種を受けていない犬の死亡率が高い恐ろしい病気です。この病気は犬科の動物だけが感染します。

原因

原因はパルボウイルスの感染です。感染は主にパルボウイルスにかかった犬の吐物や排泄物を舐めることによる経口感染で成立します。潜伏期は2～6日程度で、非常に感染力が強く、ある地域で流行し始めると抵抗力のない仔犬を中心に次から次へと感染していきます。ジステンパーと違って季節性の発生特徴が認められずほぼ1年中発生する可能性があります。

症状

症状は、大きく別けると消化器型と呼ばれるものと心筋型と呼ばれるものにわけられます。消化器型はとにかく激しい嘔吐と下痢、少し時間がたつと大変異臭を放つ血便を始めます。食欲はまったくなくなり、水も飲まずに嘔吐と下痢を繰り返すために、あっという間に脱水し、みるみる弱っていきます。心筋型の場合は、健康だった仔犬が心筋炎を起こし、突然死亡したり、呼吸困難をおこして数時間で死亡したりします。

診断法

動物病院では、一般的に、問診、視診、触診、血液検査などを行い仮診断して治療を始めます。また、最近では少量のウンチからパルボウイルスの存在有無を判定するキットも発売されていますので院内で簡易判定することができることもあります。確定診断を行うには、検査機関に依頼して抗体検査や特殊な方法によりウイルスを確認します。

治療法

今のところパルボウイルスを殺せる薬はありません。そのため獣医師の手によって様々な治療方法が試行錯誤されてきましたが、はっきりとした効果が判定された療法はありません。

一般的には細菌の二次感染を防止するために抗生物質解熱剤、抗炎症剤、神経症状が出ている場合は抗てんかん剤、症状にあわせて点滴や栄養剤、止血剤の投与、輸血などの対症療法を行います。また、インターフェロン、血清療法が用いられることもあります。

自宅での看護法

治療は獣医師に任せるしかありません。自宅では、発病した犬は特に大量のパルボウイルスを排出しますので、他の犬への感染に十分注意してください。これは病気から回復してからも数カ月（6ヵ月程度）注意する必要があります。排泄物や食器、敷物などは焼却処分、あるいは消毒剤でよく消毒します。ただしパルボウイルスは非常に一般の消毒剤に強い抵抗を示します。0.17%次亜塩素酸ソーダなどが適していますので、ご家庭では家庭用漂白剤などで使えるものがあります。

退院あるいは通院できるようになったら、消化がよく栄養価の高い食餌を与え、獣医師から指示された投薬をきちんと行いましょう。また、暖かく十分な湿度を保った環境を整えてあげ、汚物などはこまめに処理してあげて清潔な環境を保つことが重要です。

予防法

ワクチン接種で予防するしかありません。パルボウイルスが犬の体内に侵入しても、ワクチンにより免疫ができていれば発病することはありません。

メモ

仔犬が生まれたら、母犬から初乳が与えられ、パルボウイルスに抵抗する力をもらいます。しかしながらこの力はいつまでも続くものではなく数カ月でなくなってしまうので、必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムと追加接種を行いましょう。また、母犬のワクチン接種の有無が仔犬に大きく影響します。妊娠前には必ず獣医師に相談して適切なワクチンプログラムを行いましょう。